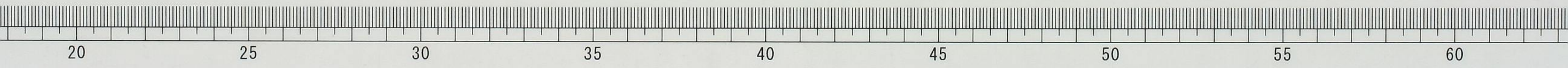


三井寺

山寺の春乃夕言集てみまへ入相の  
 かひよたう敷きる三友おめらもあはと  
 夢のまと言めくしき卯あのはきの  
 いもせとおむきぬく乃恨然そあ  
 行清も枕の種やひきそへ又まの  
 宵よ文行種れ夢はあひあわらぬ  
 鳥ハ物く目と極きし色恋路の便りの  
 春夜の声とゆあを又きあひくをれ  
 福さあちあるちへ成今おひの福  
 の夏たももあう心の鉢らに注  
 種れははくくと思ひを注すあの  
 月きをつづの時よりく入ま月  
 露を鳴く霜天よらてまき御を  
 江村乃漢火もほのうみ半夜の種ひ  
 ちきハ客乃あまやかみんほうそ  
 うあちそりて別し増落のくら枕  
 うた種るかきる此うら六波羅もあつ  
 かして秋の夜すう月と心三井寺の  
 種るらやまき

蟬丸

花の都を立四てく浮種よあくりかも



うた福うかきさうせうろく波風もさつ  
かきし秋の初すさう日とむ三井の  
静うらやまき

蟬丸

秋の都を立廻てく浮城よあけりわも  
川や東白川を舟りり栗田にふも  
あけりハハハ誰とり松坂や笑のふ  
たと思りハハ秋よあや音羽山の名  
海胡の初や松むすまきりく  
まのあやや夕のけの山科れ里人も  
こむむなよねあれとや清瀬川  
あけり逢坂の宮乃清水よ秋え  
さ今やひかきこ望月の初乃あきも  
思ほくうあもき井乃秋えれい我  
なう御まや髪ハおとろをささき  
まあきこし礼も思てさう逢坂の  
秋うつる水と後と夕あううつる  
み秋すこしや

三三三

あけりあし難波津のくあもあまの  
しらまそああひきんあこころ  
あし海土のふあきさうあおあらね





お進みお祝の羅とくさるるしんご  
國事よまわらぬあはれ

### 巻之版

しらぬまのあはれしんご  
よのあしと清とまらちるしんご  
よふえたる有柳のまをゆきまやんく  
面白や心あえんくみみちりやだのよる  
海士りこ好あまんあまきさくぞいの  
海もあまのれん流もまらさるるまきあとり  
あまのりや難波津のまあねやあまあま  
乃花りさぬそまをれ廻りや物も有  
唱の月れりあお神さく天津しゆまきぬを  
きねのねまのしきまきさく物あぬのせり  
袖まひらぎるあまあつしみるるるの屋  
波あまのまらにまらまらまら  
しらぬまのあはれしんご  
くみくもまら心たれりや

### 願書

ニサナリ会釈  
トニナラツトニニニニニニニニニニニ  
々々帰明頂禮八幡大菩薩八日城朝

ニクサリ金釈  
ノラスサリ

# 願書

何れ帰明頂禮八幡大菩薩八日城朝

延乃中皇恩を明君に農祖たる家

祿を守りて為る君とをばとてん為る

三才の災玉容をあかりて之可れ權

扉を打ちひらき給く新室よ志きり

乃年より汝く平相國こりる者あり

く四海を掌り萬民を憐れん

や是佛法あり王法の敵ある作

曾祖父前の陸れ國り守るを宗廟の

氏族に御附す義仲いやも其後

胤として世大功をおちん奉たえん

嬰児の露をとりて巨海をちるを

蟠蛇の脊をとりて龍車をむふとく

也汝れ君を為國のためよ是を

おちんこのあり汝を願をち神明

三才の災玉容をあかりて之可れ權  
扉を打ちひらき給く新室よ志きり  
乃年より汝く平相國こりる者あり  
く四海を掌り萬民を憐れん  
や是佛法あり王法の敵ある作  
曾祖父前の陸れ國り守るを宗廟の  
氏族に御附す義仲いやも其後  
胤として世大功をおちん奉たえん  
嬰児の露をとりて巨海をちるを  
蟠蛇の脊をとりて龍車をむふとく  
也汝れ君を為國のためよ是を  
おちんこのあり汝を願をち神明

也。我れも君乃為國のためよ是を  
おさるのこゝろ。彼を願ふを神明  
納受たまはる。自勝るを究めつ。あ  
を四方よ退きたまふ。壽永二年丑月  
日。だるのよ讀上まら。義仲願  
書よのつゝ。矢を神前よ捧り。反  
御供乃共たし。聖文れもをひもり  
は。彼室前よ。作て。南無歸命頂  
禮。八幡大菩薩。こそ。皆礼ねをま  
す。れ

ひき

致白起請文の事。上る。天皇釋  
皇。天皇。熾魔法。五道の冥宮。泰山  
府君。伊勢。地。伊勢。天照大神と  
す。め。伊豆。相根。留士。海河。然  
野。三河。入。山。野。城。鎮守。稿。行  
祇園。賀。貴。船。三。河。松。尾。卒。節

子

致白起請文の事、上る梵天帝釋  
 聖人天王熾魔法王五道の冥宮泰山  
 府君那界れ地子ハ伊勢天照大神と  
 伊豆相根留士海河懸  
 野之河全安山麓城の鎮守禰行  
 祇園堂貴船八幡三河松尾平野  
 也して日本國の及心の神祇冥道  
 請致し、殊子ハ氏乃神々  
 多子討平よ死したる事ハ洗  
 偽り見あはれ洗言言の浄界を  
 あつる奴妻ハ何ハ酒土罪をいせ  
 者也、起請文くのも、文  
 治元年九月日、あさ、讀したるハ  
 牙乃毛しよたらて、いたるもきり



偽り是非あり及誣言言の所罪を  
あつらひぬせり何れも過罪を  
者也起請文くのも一  
治元年九月日あき讀上たる  
牙乃毛しよたらてういたるきり

贈題目庵老入成利也  
得方果老入同年也  
王母也